

## ホセア書12章2-5節 「ベテルで出会う神」

### 1A 言い争われる神 2

### 2A 神と争う力 3

### 3A 泣いて願った勝利者 4

### 4A 万軍の主 5

## 本文

ホセア書 12 章を開いてください。私たちのホセア書の学びは、11 章まで来ました。最後の三章分を午後礼拝で読みます。今朝は 12 章 2-5 節に注目します。「2 主は、ヤコブを罰するためにユダと言い争う。ヤコブの行ないと、そのなすことに応じて、主は彼に報いる。3 彼は母の胎にいたとき、兄弟を押しつけた。彼はその力で神と争った。4 彼は御使いと格闘して勝ったが、泣いて、これに願った。彼はベテルで神に出会い、その所で神は彼に語りかけた。5 主は万軍の神。その呼び名は主。」

私たちはホセア書において、北イスラエルがヤロブアム二世の治世の下で豊かになったけれども、偶像礼拝に陥り、アッシリヤに滅ぼされることについて、主が、ご自身に立ち返るように促している預言です。私たちが世の思い煩いによって、神から離れて、神以外のものに夢中になっている中で、神がそれでも何とかしてご自身に引き寄せようとしておられる、その愛の書であります。

### 1A 言い争われる神 2

まず主は、「主は、ヤコブを罰するためにユダと言い争う。ヤコブの行ないと、そのなすことに応じて、主は彼に報いる。」とされています。ヤコブが行なっていること、そのなすことに応じて報いられるということですが、具体的にはその前の節 1 節に書いてあります。「彼らはアッシリヤと契約を結び、エジプトへは油を送っている。」ヤロブアム二世の死後、イスラエルは休息のその国力を失っていきました。そこで彼らは、北にはアッシリヤ、南にはエジプトという大国に囲まれている状況に気づき始めました。それで、自分たちを生かすために両国を天秤にかけて、それである時にはアッシリヤと約束事を結び、けれども裏ではエジプトに貢物を持っていくような、二股外交を行っていました。言うならば「よい所取り」をしようとしていたのです。

これは、神を知らない国民であれば、人の力だけ信じている国であれば、ある程度行なっていることでしょう。日本であれば、隣国の地域大国中国があり、けれども自由・民主主義、西側の勢力として日米同盟によって、米国側についています。けれども、東アジア共同体という構想を立てて、米国とではなく日中韓の共同体によって地域の平和に貢献したいという人々もいます。こうやって国は、周囲の大国の間に囲まれて生きているのですが、しかし、イスラエルは主を神とする民

であり、選り別れた聖なる民です。周辺の国々の目を気にする前に、主ご自身を恐れて、この方の名を呼び求め、祈り、願い、その中で相手国にどう対応するのかを考えるはずです。けれども、自分たちの力で自分たちの豊かさを守ろうとしていました。私たちの生活にもあるでしょう、自分の面子を守るために、この人にも、あの人にもいい顔をしておこうとします。自分を守るために、原則を捨てて右に行き、左に行って揺らいでいます。しかし向かなければいけないのは、右でも左でもなく、上、主ご自身であります。

主は、この点について、「**主は、言い争う**」と言われます。主は、イスラエルのことをここで「ヤコブ」と呼ばれています。もちろん、イスラエルの国の父祖はヤコブです。けれども今、「あなたがたの父祖ヤコブ自身のことを思い出しなさい。あなたの父ヤコブが、どのようにしてイスラエルになったのだ？どのようにして、主なる神であるわたしに会ったのだ？」と問う、ということです。神の民は、神に対してでさえ、議論するときがあります。神にさえ自分の主張を言い立てます。アブラハムが、ソドムを滅ぼさないでくださいといて、五十人の正しい者がいたらどうするのですかと訴えました。そして四十人、三十人と姑息にも、人数をどんどん減らしていきます。

ヨブは、自分の受けている苦しみに対して、自分がいかに悪いことをしていないのか、自分の正しさについて訴えました。そして主は、嵐の中に現れて、ご自分の計画、行なわれていることについて、あなたは知っているのか？と逆に問い質されました。そしてヨブは、自分のつまらなさに気づき、灰の中で悔い改めました。主に訴えたところで、議論に負けるに決まっているだろうに、やっけてしまっています。これは否定的に見えますが、実は、これでこそ神の人になれると言ってよいでしょう。主にはっきりと、降参することができるからです。主から心が離れている、あるいは自分のうちに何か隠し事をしている、それが分かって二心になるのではなく、神にすべて自分の心を明かす。そして、神に自分の至らなさを明らかにしていただき、それで悔い改めるのです。そこで主から責められて、痛みと傷をもって、初めて神の恵みにあずかることができます。そしてその痛みと傷さえも、主が癒してくださいます。

これからヤコブに対して、主が、真正面から争われるところを見ていきます。ヤコブもまた、主に對してさえ争った人物であり、主によって砕かれた人物であります。

## **2A 神と争う力 3**

3 節に、「**彼は母の胎にいたとき、兄弟を押しつけた。**」とあります。ヤコブはとても、愛されていた人です。彼は愛されるような特質があったので、愛されていたわけではありません。むしろ創世記に書き記されているヤコブの生涯を読むならば、彼のことを好きになる人はかなり少ないでしょう。人を出し抜いて、時に騙しながら、祝福を横取りしていった人だからです。名前の意味が、「かかとを掴む者」です。母リベカが双子を妊娠し、先に出たのはエサウなのに、そのかかとを掴みながらヤコブが出て来たからです。相手のかかと、つまり弱みを掴んで自分が先んじようとする力を彼は

持っていました。

しかし彼は愛されていたのです。旧約聖書の最後の書、マラキ書には「わたしはヤコブを愛した。わたしはエサウを憎み・・(1:2-3)」とあります。主ご自身が生まれる前から、彼のことを愛していました。そして彼の生涯、彼を愛していることを、彼に祝福を与えることによって示しておられました。創世記の中に、神がヤコブに対して、何かを罰するようなことを宣言しているところはありません。主が理由もなく、根拠もなく、むしろ人からは憎まれるようなものを持っているかもしれないのに、ただ憐れんで、一方的に愛し、選んでくださったのです。それで、リベカの胎内にいる時に、主は彼女に、「兄が弟に仕える。(創世 25:23)」と告げておられたのです。

ヤコブ自身は、貪欲なまでに神を求めていました。神の祝福を求めていました。自分が神に愛され、選ばれていることも知っていました。選ばれているからこそ、神の祝福を得るためにその力で兄を押し退けました。ヤコブが、レンズ豆のスープを作っている時にエサウが獵から戻って来て、腹ペコでした。それでその赤い物を食べさせてくれとせがんだのですが、ヤコブは、「長子の権利を私に売りなさい。」と言ったのです。イサクに与えられた神の祝福を受け取る権利のことです。これをエサウは、「長子の権利など、今の私に何になろう。」と言いました。まるで俗な人ですが、けれども大勢の人がそうではないでしょうか？自分にとって最も大切なもの、命について、それがどうなるかについて考えずに、神の命令について考えずに、「今」の自分にとって都合の良いものを選び取っていますね。けれども、ヤコブはそうやって神の祝福を自分の力で取っていくという人物でした。

しかし、ヤコブは大いに祝福されながらも、年を取ってからエジプトのパロに、「創世 47:9 私の齢の年月はわずかで、ふしあわせで、私の先祖がたどった齢の年月には及びません。」と言いました。彼の人生には不幸せと呼ぶべき、いろいろ厄介なこと、いろいろなごたごたの中に入っていました。初めは、イサクの前で自分がエサウだと偽ったことです。イサクが兄息子エサウに、自分の死の前に祝福しようとしたのです。それで、妻リベカが弟息子ヤコブに、エサウに変装して、肉の料理を出して、その時に父に祝福を受けなさい、と指示しました。イサクは目がもう見えなくなっていたので、ヤコブをエサウだと思って、ヤコブを祝福してしまいました。それで、本物のエサウが帰って来ても、彼には祝福は残っていませんでした。それでエサウがヤコブを憎みます。それで家からヤコブは出て行かなければいけませんでした。しかし、主はヤコブを祝福されます。ベテルというところで、天の梯子の夢を見せて、アブラハムとイサクに対する神の祝福の約束を、豊かに受け継ぐことを語られました。

ヤコブは、母リベカの親戚のところ、ユーフラテス川上流のアラム地方、今のシリアのところまで行きました。そこでお嫁さんを見つけるためです。そこに、ラケルという女性がいました。彼女がラケルの兄ラバンの娘だったのです。彼女が大好きになったのですが、花嫁料として七年間、彼

女のために無償で働きました。ところが結婚式の時、初めての夜を過ごしたところが、相手はラケルではなく姉レアだったのです！ラバンは、「私たちのところでは、まず姉娘から嫁に出すのです」と言って、それで「ラケルも与えるから、さらに七年間働きなさい。」と言います。ヤコブは、自分がエサウを騙したように、今、ラバンに騙されたのです。しかし、ここでも主は彼を祝福されます。二人の妻から十二人の息子と、その他娘たちも生まれました。

そこで合計二十年、無償で働き、ラバンの貪欲によって虐げられ、騙されながら正直に仕事をしていました。今でいうと、パワハラです。けれども、主は彼に、数多くの家畜、数多くの僕で祝福してくださいました。それでヤコブは故郷に帰ることに決めたのです。そのことを知ったラバンは、はっきりとヤコブに危害を加えようと思っていました。殺されてもおかしくなかったでしょう、けれども主が彼に語られて、ヤコブと家族は守られました。主は彼を愛し、選び、祝福を与えられるのですが、彼はいろいろなごたごたに巻き込まれていました。

そして、「**彼はその力で神と争った。**」と書かれていますね。ついに、ごたごたは神ご自身にまで至ります。彼が故郷に帰る時に、彼にとっての肉体の棘であるエサウのことが気になっていました。自分を殺そうとまで思っていた兄です。ラバンの場合は、外側の問題であり葛藤でありましたが、エサウの場合は違います。彼の心の負い目となっていました。しかし、ヤコブが旅を続けていると、なんと二つの天の陣営がありました。ヤコブを守ってくれる天使たちです。そこは神の陣営、マハナインと呼ばれます。しかし彼は、エサウが400人もものを連れてやって来ていると言うのです！それでヤコブはすばやく、羊や牛、らくだの群れを二つに分けました。一つが打たれても、もう一つがその間に逃げて生き残るためです。それから、彼は主に叫び、祈りました。はっきりと、エサウを恐れていることを伝えています。そして、彼はエサウへの家畜の贈り物を、いくつか用意して、それを、少しずつ距離を置いて前進させました。彼の怒りを宥めるためです。彼は次々と、自分がエサウから救われるために動いていったのです。

そして、ヤボク川を全て渡せます。自分だけがあとに残りました。「創世 32:24 すると、ある人が夜明けまで彼と格闘した。」とあるのです。この方について、ヤコブは、「32:30 私は顔と顔を合わせて神を見たのに、私のいのちは救われた。」と言いました、御使いなのですが神ご自身、主イエス・キリストご自身のことです。

このようにして、神に愛され、選ばれ、それで祝福を受けていた者が、自分の力でなんとかしてその祝福を受けようとしていました。しかしその力はなんと、神ご自身とも格闘するほどの力だったのです。「ピリピ 1:6 あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。」主はご自分で始められた良い働きを、ご自分で完成させてくださいます。けれども、私たちが自分の力で何とかしようといういろいろ動いて、結局うまくいっていないことを見ないでしょうか？そして、いつの間にか自分が恐れている

ものに、もっと近づいていることはないでしょうか？結局、自分は逃げているようでその問題に近づいて言っているのをみます。そして実は、そのようにさせているのは紛れもなく、主ご自身であることを知るのです。それで格闘するのです。ヤコブのように格闘します。

### 3A 泣いて願った勝利者 4

そして4節に、「彼は御使いと格闘して勝ったが、泣いて、これに願った。」とあります。創世記32章にある神とヤコブとの格闘は、一見すると、神がヤコブに降参したかのように描いています。「32:25-28 ところが、その人は、ヤコブに勝てないのを見てとって、ヤコブのものつがいを打ったので、その人と格闘しているうちに、ヤコブのものつがいがはずれた。するとその人は言った。「わたしを去らせよ。夜が明けるから。」しかし、ヤコブは答えた。「私はあなたを去らせません。私を祝福してくださなければ。」その人は言った。「あなたの名は何というのか。」彼は答えた。「ヤコブです。」その人は言った。「あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。あなたは神と戦い、人と戦って、勝ったからだ。」神に対してヤコブが、祝福を要求して、神がしびしびその要求を受け入れているように見えますが、ホセアの預言がそれを否定しています。ヤコブがどうしても、自分の力で神と争うから、そしてその意地が堅いから、それでその御使いが彼の太ものつがいを外したのです。相当な痛みだったでしょう。いや、それ以上に、もう自分の力でエサウの手から免れることができないことを知ったのでしょう。それで、彼は泣いたのです。そして懇願したのです。泣きながら、「私はあなたを去らせません。私を祝福してくださなければ。」と懇願しました。

そして主は、彼に新しい名を付けられました。それが、「神に勝つ」という意味のあるイスラエルです。あるいは、「神の支配」とも訳すことができます。神に勝つとは何でしょうか？神に負けることです。神に降参することです。神に負けたものが、神の勝利者となります。自分に敗けた時に勝ちます。パウロは肉体の棘が与えられた時に、「弱いときにこそ、私は強いからです。(2コリント 12:10) と言いました。私たちが自分で弱いと思う所、そこから逃げて自分の力で補おうとしていたところ、そういったところを神に持って行って、そのまま神の前に出せば、神がそこで出会ってくださいます。

そこで主は、「彼はベテルで神に出会い、その所で神は彼に語りかけた。」とされています。ベテルは、ヤコブがエサウから逃げて、母リベカの故郷に向かう時に、石を枕にして寝ていたところでした。そこで、天からはしごの夢を見て、御使いがそこを上り下りしていました。その傍らに主ご自身がおられたのです。そして仰せられました。「28:13-14 わたしはあなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。わたしはあなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫とに与える。あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西、東、北、南へと広がり、地上のすべての民族は、あなたとあなたの子孫によって祝福される。」それで、ヤコブは「28:17 この場所は、なんとおそれおおいことだろう。こここそ神の家にほかならない。ここは天の門だ。」と言って、その枕にした石に油を注いで、そこをベテル、神の家と呼んだのです。

私たちは、どうしても自分が引き寄せられる何かがあって、それに没頭してしまい、いつの間にか主の家を忘れてしまうことはないでしょうか？主がどのように自分を召し、その中に歩むように命じられているか忘れてしまうことがあるでしょう。その中で主ご自身の臨在から離れてしまい、自分がこうしなきゃ、ああしなきゃ、というような自分の力に頼る生活へと変わって行ってしまいます。しかし、主が「わたしがここにいる」と呼んでくださっているところがあります。その自分の持ち分があります。任せられている使命があります。日毎に、御霊に導かれ、語られているところがあります。そこに、主がおられるというご臨在があります。これが神の家です。「詩篇 27:4 私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、主の家に住むことを。主の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。」主の家にいることによって、私たちは神の救いのご計画の中で、その働きの中に自分を置くことができ、憩うことができます。

#### **4A 万軍の主 5**

そして、「**主は万軍の神。その呼び名は主。**」と言われます。ヤコブは、故郷に戻る旅を始めた時に、彼自身が、「32:2 ここは神の陣営だ」と言ったのです。神の使いたちが彼に現れていたのです。ですから、鬼に金棒ならず、御使いに戦いの剣といたらよいでしょうか、御使いが自分のために戦い、守ってくれるのです。ですからここで、「**主は万軍の神**」と呼ばれています。そして、ヤハウエなる方、その名前は「必要と一つになる」という意味です。私たちが持っている必要、自分がいつも恐れていること、自分がいつも弱いと感じているところ、その必要になってくださり、それで私たちのために戦ってくださるのです。

ヤコブはこの後にエサウに会います。エサウは、ヤコブを殺すどころから強く抱擁してくれました。自分が逃げようと思っていたのですが、その殺意を神が変えてくださったのです。神はこれまでヤコブに真実であられ、祝福を増し加えようとしておられたのに、そこで自分の力で動いて、自分の生活でごたごたを増やしてしまいました。真実に主に近づきましょう、自分の弱さや負い目も含めて、主に取り組みましょう。時にヤコブのように祈りの中で格闘するかもしれない。けれども、格闘しましょう。その足を引きずった状態の方が、自由にされるかもしれません。弱くされたほうが、自由に主に用いられるかもしれません。